

## 女人結界の意味するもの

——結界とは——

金本拓士

前回、現代密教において、「仏教と女性」という論文において、マハーパジャパティ等の女性の出家譚、および  
仏教神話に見られる人間創世譚を通して、釈尊および仏教の女性観を若干ながら考察してみた。

このときの論文の意図するところは、釈尊に女性蔑視の考えがあったのかどうか、ということではなく、仏教に  
とって、女性を愛欲と関連づけて見ざるをえなかったのは何故か、ということであった。

この女性と愛欲の問題について、それは男性修行者側からの、女性は修行を妨げる存在であるという勝手な思い込  
みからきたのか、あるいは女性という存在そのものが、世界を絶え間無く生成していくエロスそのものであり、この  
世界から超脱すること（世俗を離れること）を目指す仏教にとって、その女性に近づくことは危険なことであったの  
かどうか、ということであった。

そこで、今回は何故仏教にとって女性という存在を遠ざけなければならなかったかという問題を、日本における女  
人結界を中心に考えていくものである。

一、結界という言葉について

そもそも結界という言葉は仏教において、どういう意味をもっているのだろうか。例えば、中村仏教大辞典を引いて、「結界」という言葉を見てみるならば、次のように説明されている。

教団に所属する尼僧の秩序を保持するために、ある一定地域を限ること。尼僧が過失を犯さないように戒律をたもつため、一定の地域を区画制限する。(1)ことに受戒や布薩などを行なうために作法を行なって定めた、大界・戒場・小界などの限られた地域を撰僧界という。(2)僧が三衣から離れて宿すると罪になるが、この内では罪とならない界を撰衣界という。(3)食物の貯蔵所を結界した撰食界は、僧の住所で食を煮る宿煮の罪を犯させないための配慮である。

ここで見る限りにおいて、「結界」という言葉は、僧侶が戒律を保つために、必要な領域境界を指しているようである。つまり、そこには、僧伽という聖なる空間を維持するための境界であり、その境界そのものが、外から障碍を防ぐという意味は無いようである。

しかし、この結界の意味が密教においては、我々が本尊瑜伽を修法する際、行者が本尊と瑜伽を為す場、その聖なる空間を現出するために施される淨化手段となる。その結界は、聖なる空間の外からもたらされる障碍から保護する機能が求められている。この意味においては、初期の仏教とは違った意味が「結界」に含まれているということができよう。

弘法大師の『性靈集』巻九の「高野山に壇場を建立して結界する啓白の文」(弘法大師全集第三輯五三一頁)では

「この伽藍の東西南北四維上下において、あらゆる一切の正法を破壊せん毘那耶伽、諸の悪鬼神等は、みなことごとくわが結界の処、七里の外に出で去れ。」と書かれているように、ここで使用されている結界とは、上に示したように、聖なる空間を保護し、外からもたらされる諸魔を防ぐための意味が含まれているのであろう。

これを日本の仏教における「結界」の意味とするならば、「女人結界」という言葉は、とりもなおさず、女人 $\parallel$ 諸魔と同じ表現となってしまう。しかし、弘法大師が言う結界には、あくまでも諸魔を結界するという意味で、この言葉が使用されるが、女人を結界するという意味は無い。また、伝説では弘法大師が高野山を求めるときに、丹宇明神という女神の助けを得ているし、高野山にその女神が祀られているのだから、そもそも弘法大師の当時には、女人を結界するとまでは言われていなかったと考えてよいであろう。

では、日本において「結界」することは如何なる意味をもっていたのであろうか。

「結界」の日本的な意味について、垂水稔氏が『結界について(1)―日本の結界標示装置―』(国立民族博物館研究報告三巻一号)に詳しく論じられている。そこでは、日本において、「結界」という言葉は中国から密教の伝来と共に輸入された言葉であると指摘し、それ以前の境界標示装置としては「標」あるいは「榜示石」であるとす。

そこで「標」とは、「シメは占め(占有 $\parallel$ 立入禁止)の印(シルシ)あり、印(しめ)のあることによって占有(占め)の状態を標示したものと考えられる。また、シメはユヒ(結び)、サシ(刺し)、タテル(立てる)ものであった。縄を結び、串を刺し、また、しるしを立てて、境を限り、土地の占有を標示したのである。」(垂水、六六頁)と説明し、更にこの標が神觀念の進化によって、いわゆる標縄によって代表されるように、神そのものを示すものとなっていったと考える。「古代にあっては、標がたんなる境界標示物ではなくて、神そのもの、下っては神の依代としての地位が与えられていたことが知られる。標刺しは、やはり本来的には神事だったはずである。」(垂水、六

九頁)

また「榜示石」については、基本的に榜示石は壊れやすい、腐りやすい標が堅固な石に変わったものであるとする。そして、この「榜示石に仮託された「聖」性は、結界石、山神石、比丘尼石、姥石といった形で後代に引きつがれていく。石は石神なのである。」(垂水、七一頁)と説明する。そして、垂水はこの標という日本の境界標示装置に結界の意味が付されていくのは先にも述べたように、密教の影響であるとするのである。

さて、結界の機能については、日本においては境界標示装置であり、そこから発展して神の依代そして、神そのものと変化していく。それは特別な領域とその他とを区別するものであると同時に、それは聖なるものを示す標となる。しかしそこには厳密に不浄性を排除する意味が含まれてはいないようであり、ましてや女性そのものを排除する意味は全くないと言ってよいであろう。

では、仏教における結界という言葉にも、あるいは日本における標の概念にも女性を不浄なるものと見なす要素はないとするならば、結界あるいは、標で示される聖性なるものと対立する存在として女性を蔑視していく考えが、いつから生まれてきたのであろうか。

## 二、女人は神聖ならざる存在なのか

法然上人の『黒谷上人語燈録 巻第一』(大正八三卷二六一―番一〇九頁)に次のような記述がある。

高野山は弘法大師結界の峰にして、真言上乘弘通の地なり。三密の月輪普く照らせど女人非器の闇を破せず。五瓶の智水、等しく治せども、女人垢穢の質を灑がず。

法然が活躍した時代にはすでに高野山は女人結界の地として定まっていたようである。また、この引用した所の前には、比叡山も「谷を限り、峰を画して女人を入れず。一乗の峰高く峙し、五障の雲、翳無し。」とあるように、同様な表現がなされている。<sup>(1)</sup>

先に述べたように、「結界」という言葉が密教の伝来とともにもたらされたとするならば、この女人を結界することも、「五障三従」の考え方が仏教によって伝来されたことと同じように、密教の中に女人の不浄観があつて、それに伴つて成立したのであるうか。しかし、最初に述べたように、仏教、あるいは密教における結界そのものには、女人に対する不浄観はないとするならば、女性が不浄なる故に山の聖地から締め出される結果になつた理由を外に探らなければならない。そもそも日本において、女性の不浄観はあつたかどうかを考えなければならないだろう。

かつて、古代日本の司祭者として、歴史に名を留める卑弥呼は女性であつた。彼女はシャーマンとして、国の政を司り、彼女の弟がその託宣に従つて実際の政治を運営していたと言われる。これは中国の歴史書『魏志倭人伝』に引かれている記述であるが、この頃の日本においては、決して女性は汚らわしきものではなかつたようである。

また、卑弥呼に限らず、日本の古代史において、女性は宗教儀礼に際して無くてはならない存在であつたことが伺えるのではなからうか。

例えば、天照大神は、最高至貴の神、皇祖神として祀られているが、天石屋の神話においては、天照大神が神を奉る神饌を収獲するため耕作していた時に、弟である須佐之男命がその田を荒らし、神殿を汚したために天石屋にこもられたことから、天照大神自身が祭祀者として見る事ができ、さらに須佐之男命が天照大神を「姉」と呼んでいることから女性ととらえることができる。また神道において、御巫(神々に奉仕する童女)、造酒童女(神事用のお神

酒を作る童女)、采女(神事に御膳を用意する女性)等、神々に奉仕する重要な役目の多くが女性によってなされていたことから、古代の日本において女性が神聖な場から排除されなければならない存在ではなかったようである。それは言い換えれば、女性は決して男性よりも地位が低いものとして見なされなかったことがわかる。

卑弥呼にしても、天照大神にしても、あるいは神に仕える女性たちに共通なことは、彼女たちは神々と接することができるシャーマン的な存在であることが指摘できる。

今日においても、恐山にいるイタコや沖繩にいるユタである彼女たちは神あるいは、あの世の世界へ行った死者の霊と交流するシャーマンであり、近代以降の日本に湧き起こった新宗教の教祖(天理教の中山ミキ、大本教の出口ナオ、戦後においては霊友会の小谷喜美、立正佼成会の長沼妙佼)が、いずれも女性の神懸かりからもたらされる力によって多くの信者を獲得していったことも考え合わすならば、日本において、女性ほどシャーマンとなる傾向が大きいたと言えるであろう。

さて、神々と親しく交流することが可能である女性が、聖性と引き裂かれ別れざるをえなくなった理由として三不浄の問題がある。

三不浄とは、血穢、産穢、死穢である。この中、女性には三不浄を持っていることから汚れる者とみなされる。

この三不浄について、波平恵美子は次のように説明する。

日本人の(広義の)信仰体系の中で、明確に表れ出てくるこの三つのカテゴリー「ハレ・ケ・ケガレ」には、一般にどのようなものが類別されているであろうか。ハレに範疇化されるものは、日常的でない、異常で特殊なもののうち、特に神ごとに係わる事柄、「善」と人々によって見なされる事柄、幸運や縁起の良い事柄、そして

清浄さが強調されている事柄である。一方ケガレに範疇化されるものは、非日常的で異常なもののうち、邪悪なもの、病的なものや不完全なもの、不運、そして死や出産、性交などによって引き起こされる不浄性を帯びる事柄である。(波平恵美子、『ケガレの構造』二〇五—二〇六頁 青土社)

女性にとって月経は古代の女性であっても存在しないはずはない。神とかわる女性は血の穢れによって、女性は全く神事から排除されるのではなく、その異常な時期だけは忌み慎んでその時期が過ぎれば、再び祭りに参加できたのである(『神道 女性祭祀の伝統と禁忌』渡辺真弓 歴史読本 五月号一九九二年)。

また、産穢について見てみるならば、例えば山の神は産神とされる地域は広くあり、出産にあたり、山の神を迎えると山の神は産神として産小屋で、妊婦を守ってくれるといわれ、出産を伴う血穢を忌避しないとされる(日本宗教学典六二〇頁)ことから、決して山の神自身が産穢を嫌っているとは考えられない。

となると以上の三不浄のうち血不浄、産不浄故に女性が穢れていることから、単純に女人結界が生じたと考えるところはできないし、またこれまで見て来たように古代においては女性を不浄視してきた事実もないようである。

女人結界について、修験道辞典は次のように説明している。

女人禁制の理由については、一般には女性の出産や月経の穢のためとされている。しかしこの他にも、村落社会の宗教行事における男子中心主義が山岳修行にも適用されたとか、男性の修行者が山の女神のもとで修行するために世俗の女性を忌避したなどの解釈がなされている。(『修験道辞典』宮家準編 二九四頁 東京堂出版)

ここで述べられていることで、山の女人禁制は産穢や血穢も一つの理由とされているが、注意すべき点は男性中心主義が女人禁制をもたらしたという点であろう。

なぜなら、女人禁制をとえながらも、かつて熊野においては、熊野比丘尼といった、巫者たちが活躍し、また結界石に相当する姥石は山神に仕える巫女の祭場である石壇であったものが、結界を越えた女人に対する天譴として石化させられてしまった女性という伝説にかえられたという説もあるから。

村山修一は、この女人禁制について、「本来、山上には雨を下し水の恩恵をほどこす女神が鎮座し、そこはまた祖霊が宿り生命の厳選となる場所であって、巫女がその聖域を管理していた。しかるに密教が拡がり、修行者が山林に進出し山岳信仰と習合した修験道を形成し、ことに天部明王の忿怒信仰を導入、原始巫道を吸収するに至って、女性の宗教的役割は低下し、男性中心の政治社会の動向を反映して、女人は聖域から締め出されてしまったのである」〔修験道 世俗化した聖域画定〕歴史読本一九九二年五月号六一頁〕と説明している。

では、この男性中心主義が何故女性を排除しようとしたのであろうか。  
波平恵美子は産穢等について次のように解釈する。

出産・月経を不浄視することから生じるタブーは死をめぐるタブーと似ていることが多く、そのタブーの中には食をめぐるタブーが広汎に含まれていることが見出される。そのことは、一つには「不浄 (pollution)」という共通項でくくられることと、いま一つは、生と死、豊穢 (饒) と再生という、人間の生存の根底に係わる問題の一環として、月経・出産の不浄観が存在することを示している。〔ケガレの構造〕二一八頁 青土社



生と死を連想さず産穢、血穢は人間の生存の根底に係わる問題であり、その両者を持つ女性の力こそ男性にとって摩訶不思議な出来事であり、恐怖の対象ともなり得るのである。

そして女性は男性にとって、出産という実りをもたらすグッドマザーであり、また血という死のイメージをもたらすテリブルマザーという浄・不浄の両義性を合わせ持つ存在なのである。<sup>(2)</sup>

つまり、男性にとって両義性をもつ女性と接することは、ある「力」を生み出す存在であると同時に極めて危険な存在ともなり得るのであろう。

浄・不浄の問題について、赤坂憲雄は『異人論序説』にて、異人の異人たる性質として、この両義性を所有するものであるとする。

浄・不浄とは、可逆性・相補性を本質とする。もつとも穢れた不浄なるものがときにもつとも強い神秘力（浄）を有する、と信じられている。月経または分娩のさいの血や、人肝・人胆が、不治の「業病」とされたハンセン病や疱瘡・皮膚病などに効くという信仰などは、日本をはじめ世界の諸民族にみいだされる。ことに、身体の内／外にまたがる分泌物としての血は、汚染するものであると同時に清潔にするものであり、穢すものであると同時に浄めるものである、という両義性のよく知られたメタファーである。（『異人論序説』九二頁、ちくま学芸文化 筑摩書房 一九九二年）

この両義性を持つ故に女性は巫女として聖性と交わることが可能な存在とみられ、逆に穢れ多き存在とも見られるのである。

しかし、両義性を有する女性がどのように浄の部分忘れられて、不浄の部分のみが強調されていったのか。

### 三、何故女性は結界されたのか

女性の不浄視するのはもっぱら男性の見方である。しかし、本来的に男性は女性蔑視をする視点をもっていたかという、そうではないだろう。古代において祭祀の中心は女性であり、卑弥呼が託宣をし、その弟がその託宣に従って政治を執り行なっていたわけであるから。赤坂憲雄は異人とは、漂泊の民であり、かれらは定住の民にとって、危険な存在であると同時に外から幸いをもたらす神でもあるとする。そして、この遊行者たちは、例えば一遍上人に象徴されるように、村から村を渡り歩き、その村の不浄性を浄化していく、祭祀者でもあったとする。

しかし、国家が律令性によって形成されていくにしたがい、国家にとってかれら遊行者たちは、管理できない危険な存在となっていく。そして、かれらを都市の辺境にある悪所に押し込めて賤しき民と位置付けていったのである。

かつて共同体のそこからの訪れ人として、恐れと敬いのうちに迎えられた遊女は、いつしか遊行する女であることをやめ、都市にとっては「外部の内側・内部の外側」である境界の「悪所」に遊郭に定着させられる。古代の遊行女婦や中世の白拍子・熊野比丘尼らがおびていた巫女性性は喪われ、それとともに鎮魂呪術を一義とする芸能からもひき剝がされてゆく。遊郭に追いつまされた遊女は、もはやたんなる春を売ぐ女にすぎない。(異人論序説)二三五頁)

こうして、中央集権的な律令国家が次第に形を整えはじめると同時に、祭祀者としての女性の立場が零落していっ

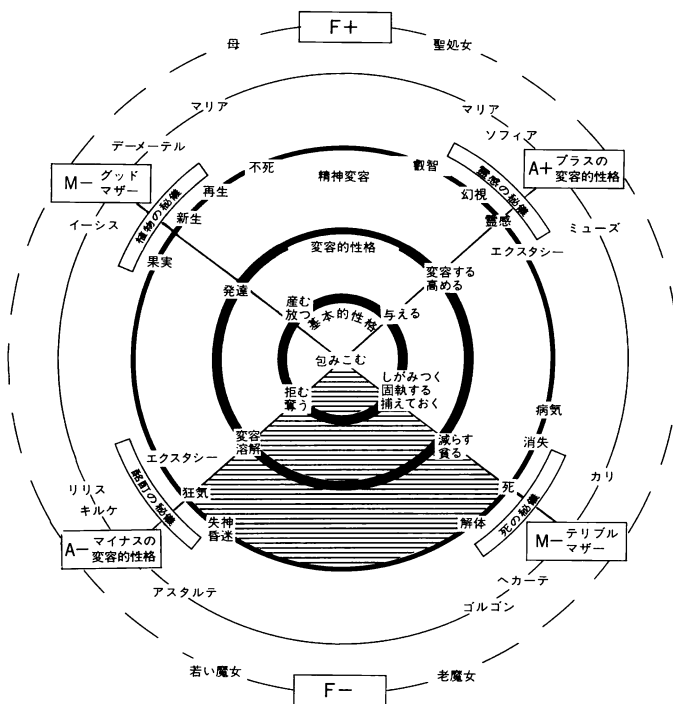
たのである。

山においても、かつては巫女たちは、神々に仕え、山に登り、山から神々からのメッセージを受けていた。巫女は自由にこの世とあの世の境界を行き来できる異人である。しかし、男性修行者たちはある特定の言葉を持たなければ超越的な存在と触れ得ることができないのである。そのためにかれらは、中国からもたらされた道教や密教儀礼を取り込むことによってのみ、聖なる存在と交流を持つことが可能となるのである。

律令国家が天皇という聖性を中心としたコスモスを形成していく過程には、そのコスモスを脅かす存在である漂泊の民、かれらは漂泊することによって、立ち寄る村々に幸いをもたらす聖なる存在であるが、そのために国家を治める立場にある側からするならば、律令国家の根底を覆すような非常に危険な存在と見なされたのであった。そのために国家はかれらを管理するために、コスモスの辺境に押し込めようとしたのである。そして、彼らは国家にとっての聖性を持つ者である天皇から遠く離れた場所にある者ゆえに、不浄性を付与されていたのであろう。河原者と言われる者たちが、一種の芸能集団であったことは、河原者が定住する以前は、漂泊の民として、聖性を帯びた異人として活躍したのではなからう。あるいは、異人が常に浄・不浄の両義性をもつことから、定住する河原者となったがために、浄の部分が剝がれ落ちて不浄のみが残されていったとも考えられる。聖性はこの世とあの世の間、つまり、コスモスとカオスの境界の間を移動することによってのみ獲得されるのだから。

先述の垂水は結果という言葉は中国から密教の伝来とともにもたらされたと言う。そのことから考えるならば、女性が山から結果されたのは、決して女性が五障をもつからでも、三不浄を身につけているからでもなく、山に入った男性修行者が中国から道教、密教等の儀礼装置を持ち込んだ結果、女性は山から締め出されてしまったのではないだろうか。何故なら、男性修行者にとって、女性は両義性を有する異人であり、山の中で作り上げた男性修行者のコス

女人結界の意味するもの



模式図III

モスを脅かす危険な存在とみなされたから。結果することによって、女性が持つ聖性の部分、ノイマンの言葉で言うならば、グッドマザーの側面が削げ落としてしまったのである。つまり、結界とは、まさに男性修行者、あるいは聖性に携わる者が自ら聖性を受け取るための装置、天皇を中心とする神道体系、あるいは修験道を完成させたためには、そのコスモスを崩壊に導く存在を認めるわけにはいかなかったのである。

つまり、結界という装置がもたらされるようになったことよって、女性は不浄なる存在へと見なされていったのである（それはかつての巫女にしても、遊行者にしても）。

つまり、女性は穢れているのではなく、男性が結界すること（コスモスの形成）によって、女性は穢れた存在という世界観が生まれていったのであろう。

(1) この記述については、廣澤隆之氏よりご教示していただきました。

(2) グッドマザー、テリブルマザーの概念についてはノイマン『グレートマザー』を参照のこと。

参考文献

- 『グレート・マザー』エーリッヒ・ノイマン 福島章 等訳  
ナツメ社一九八二年
- 『ケガレの構造』波平恵美子 青土社 一九九二年
- 『特集 女人禁制 禁じられた聖域』(歴史読本五月号) 新  
人物往来社 一九九二年
- 『柳田國男全集4』ちくま文庫 一九八九年
- 『柳田國男全集11』ちくま文庫 一九九〇年
- 『異人論序説』赤坂憲雄 ちくま学芸文庫 一九九三年
- 『聖と俗の葛藤』堀一郎 平凡社ライブラリー 一九九三年
- 『修驗道辞典』宮家準編 東京堂出版 一九八一年
- 『仏教語大辞典』中村元 東京書籍 一九八一年